

赤いきのこでリス、ハイテンション！…？

前川 啓二

はじめに

昨年 (2017 年) の暮れに、千葉県立中央博物館にて企画展「きのこワンダーランド」の一環として「文学・漫画の中のきのこ」と題する講演会があり、きのこ文人の飯沢耕太郎氏が浩瀚な情報を披露された。話を聞くほどに、昔むかし読んだシートン動物記にリスが「ルスラきのこを好んで食べて、酔う」はなしがあったことがふと思い出された。

シートン (Ernest Thompson Seton 1860–1946) の観察眼にとまった、*Russula* (ベニタケ属) を指していると思われるこのきのこの種は何なのか、また、ベニタケ類によってリスは酩酊するのか、について文献を探ってみた。

アメリカアカリスと赤いきのこ

シートン動物記を読み返していると、「リスの冒険」¹⁾ が筆者の記憶に相当する作品であることがわかった。

アメリカアカリス (Common red-squirrel *Sciurus hudsonicus*) のチカリー Chickaree が主人公を演じる小品で、シートンのキャリアのうち中期に出版された。

注目すべき箇所を以下に引用してみる。

「… 赤いルスラきのこを見つけたのです。それはアカリスにとってたいへんなごちそうでした。ピリッとした味がするのですが、リスはそれを食べると、ちょうど人間がお酒を飲んだときのように、いい気分になるのです」

監修を担当した増井光子氏が「このキノコは、日本でいうベニタケというキノコの仲間です」

と解説している。ちなみに増井氏は上野動物園の名物園長だった人物である。



ベニタケ属のきのこいろいろ

千葉菌類談話会第 69 回観察会にて (市原市民の森
2013 年 10 月 12 日)

赤くてピリッとする特徴をもつベニタケ属として、たとえばドクベニタケの分布はアメリカアカリスの棲息地と重なる²⁾。なお、本種の分布は汎世界的である。

ところが、「リスの冒険」は、原文にどうしてもさかのぼれないのである。世界各所にあるシートンの著作物のアーカイブ (たとえばプロジェクト・グーテンベルク³⁾) にアクセスしても一致する作品が登録されていない。どうしたことであろうか。

トウブハイイロリスと赤いきのこ

シートンの「リスもの」では「旗尾リスの話」が最も有名であろう⁴⁾。トウブハイイロリス (Graysquirrel (*Sciurus carolinensis*)) の Bannertail が全 37 章にわたって活躍し、第 25

章で彼はきのこの誘惑に堕ちる。章題「Bannertail Falls into a Snare」のとおりである。

それは初夏の明るい日であった。赤いきのこに惹きつけられ、1本丸ごとかじってしまった彼はたちまち気分が高揚し、叫び、だれかれかまわず（天敵のタカにも！）ケンカを売るのである。

第26章「薬物依存 The Addict」、第27章「社会のクズ The Dregs of the Cup」と続き、第28章「破滅の道 The Way of Destruction」にまで堕ちてしまう。嗚呼、われわれのBannertailは赤いきのこ常習により「廃リス」寸前になったのである。

この魔性のきのこは「... flat, round thing, like an acorn-cup, only many times larger, and reddish, with a big, thick stem on the wrong side—a stem that was white...」と表現されている。「真っ白い太い柄がついた、どんぐりの帽子を何倍か大きくしたような平たくて丸くて赤いもの」とでも訳されようか。



シートンによるさし絵

さらに、「傘は美しいバラ色で、柄は雪のように白くてばきばきしている」、と続く。（...rosy red and beautiful its cap, snowy white its stem and its crisp...）

シートンは必ずしも種名を記していないが、ベニタケ類の特徴をよくとらえているのではないだろうか。

であるのに、テレビ朝日が翻案して制作したアニメ⁵⁾ではなんと林立するベニテングタケを主人公がばりばり食べているシーンが展開されている。アニメ業界が「アニメ映え」するベニテングタケを登用したいのはいたしかたないところなのだろうか。

きのこ毒とリス

ベニタケ/ベニテン論争は一時棚上げにして、「ベニタケ属の赤いきのこ」に有意な量の神経作用物質が含まれているかどうか、そしてリスはそれに感応するか、について考えてみたい。

ベニタケ属ではムスカリンは害には及ばない痕跡レベルで検出され得るのみであり、シロシビン、イボテン酸その他の神経毒は陰性である。消化器系に作用し中枢神経系には作用しないフランジオール等のセスキテルペン類が有意に含まれる場合もあるが、ドクベニタケでは検出されない。

ベニタケ属ではあるが赤くないニセクロハツによる重篤な横紋筋融解症の発生例がヒトで報告されているが、いずれにせよ酔酩や幻覚をとともなう症状ではない。

このように調べていくと、「赤いきのこ」とリスの行動異常の関係は慎重に再考していったほうがよさそうである。

シートンの心情

シートンは、「わたしの書く物語はすべて真実である。わたしの作品の中の動物たちはすべて現実のキャラクターなのだ」と自身に課した原則を示し、「野生動物たちがみせた勇気や個性は、わたしがペンで伝えたよりはるかに強い」ことを強調している⁶⁾。

そのような姿勢に貫かれた作品は出版されるごとに高い評価を得ていったが、しかし、野生動物の研究者たちから内容の信頼性の不足がたびたび指摘されるようになった。

「旗尾リスの物語」においても「薬物依存」に陥った主人公は結局、自律のこころと家族の

支えで立ち直るのであるが、このような人間のジャンキーのリハビリにみられる社会関係をスライドさせたような過剰な擬人的表現は批判を招いた。

哺乳類学者の今泉吉晴氏は、このリスのきのこ耽溺譚の背景に禁酒法時代の世相がしのびこんでいることを指摘し、酒の弊害を暗示しているという⁷⁾。現実の地上の動物の物語であるかぎり、現実の世界の一部がまぎれこまざるを得ないのかもしれない。

狩猟動物の生活

シートンは、アメリカ哺乳類学会の創設者の立場もあり、北米の野生動物学者に観察事例の提供を呼びかけてまとめた「狩猟動物の生活 Lives of Game Animals」(邦題は「シートン動物誌」)を出版して批判にこたえようとした。

同書の第10巻⁸⁾で、トウブハイイロリスはハラタケ類を、アメリカアカリスはベニタケ類、ボタンタケ類、ヤマドリタケ類、クリタケ類およびフウセンタケ類を好んで食べることが明らかにされている。

「きのこが乾燥すると毒が消え、リスにとって安全な食料になる」ので北米のリスはドクベニタケを冬の保存食料として利用している例も挙げて「旗尾リスの話」でリスが赤いきのこを高い枝に運んで吊るし、干す行動によって「浄化 purgation」するようす(第28章)を補強している。

齧歯類には、根拠は乏しいながら、もともとアマニタ毒さえ無毒化する代謝系が備わっているともいわれている。動物がきのこで不調を呈したという報告が皆無に近い理由について野生齧歯類の研究者から、

- (A) 動物にとって有毒なきのこは存在しない
- (B) 味覚、嗅覚その他のなんらかの方法で有毒なきのこを知覚できる
- (C) きのこ中毒になった動物は症状が現れる前に姿を消すので観察できない

とする仮説が提示されている⁹⁾。これらの仮説のすべてまたはいずれかの妥当性が証明されるならばリスの菌食行動を解釈しやすくなるが、同時にリスは酔倒することもクダを巻くこともなくなってしまい、シートンのリスものにとだよう「人間味」はくすんでしまう。

わが国に目を転じてみると、リスがきのこを食べている目撃例は多いものの、体系立った報告例は少ない。その理由のひとつとしてきのこの種の同定の困難さ—とくに動物生態学者にとって—が指摘されている¹⁰⁾。

リスは印象的なかじり跡を残すことが多く、マツ類の球果の食痕は「森のエビフライ」としてよく知られている。もし、きのこにリス特有の食痕が残されるならば、それを記録することで日本産リスのきのこ嗜好のパターンをとらえる手がかりになるのではないだろうか。

まとめ

要約するならば、シートンは、

① 北米産のリスが、ベニタケ類と思われるきのこを能動的に摂食し、行動異常を起こすことを目撃した。

② 野生動物学者による類似の観察事例を集め、自身の目撃例を補強しようとした。

しかし、現代の目で見れば、

③ ベニタケ類がリスに薬理学的作用を与える可能性は低い。

このようになろう。

もやもや感是否めないにしても、しかし、動物たちと間近に暮らしてその行動を投影した作品を送り出し、また、青少年の森林活動を先駆的に啓発した場面でのシートンの業績は今なお輝かしいことは事実である。

シートンの時代からおよそ百年を経た今、作品群を読み直し、(行ったことはないが)北米の深い森を俯瞰し、そこの「赤いきのこ」に想をめぐらすのもまた楽しかりけりである。

筆者宅ではリス科の小型哺乳類(アメリカモモンガ)のつがいを飼っている。本来なら北米

の混交林を闊歩、いや滑空していたかもしれないのに狭いケージに押しこめられたこの不憫なペットは生の、および干したシイタケやヒラタケに見向きもしない。かといって、ベニタケ類を与えてみるのは、よけい不憫で... ちよつとそれは...



筆者宅のアメ리카モンガ

引用

1. E. T. シートン・著 藤原英司・訳 「シートン動物記 8」 集英社 1988 年
2. Phillips, R. 「Mushrooms of North America」 Brown and Company 1991
3. プロジェクト・グーテンベルク (Project Gutenberg) <https://www.gutenberg.org/>
4. Seton, T. E. 「Bannertail The Story of a Graysquirrel」 1922
5. 「シートン動物記 りすのバナー」 テレビ朝日、1979 年
6. Seton, T. E. 「Wild Animals I have known」 1898
7. E. T. シートン・著 今泉吉晴・訳 「バナーテイル」 福音館書店 2006 年
8. E. T. シートン・著 今泉吉春・監訳 「シートン動物誌 10 リスの食戦略」 紀伊国屋書店 1998 年
9. Fogel, R. and Trappe, J. M. 「Fungus consumption (mycophagy) by small animals」 Northwest Sci. Vol. 52:1-31, 1978
10. 澤田晶子 「霊長類のキノコ食行動 — 今後の課題と可能性」 霊長類研究、30: 5-21, 2014 年

□

[図書紹介]

■千葉県いきものかんさつガイド —千葉県生物学会 70 周年記念

編集：千葉県生物学会、出版社：たけしま出版、2018 年 2 月 18 日、125 頁、ISBN：978-4-925111-57-7、1000 円＋税

千葉の自然の奥深さを知るための手引書。三方を海に囲まれた千葉県の豊富な生物相が、地形や環境によって棲み分けているさまをトピックスで紹介、興味をそそる観察ポイントや観察スポットも教えてもらえます。まずは千葉県にどんな“隣人”がすんでいるのかを観察することからはじめましょう。身近なところのいまを知ることで、変化にも気がつくことができます。化石としてみつかる古代の生き物もいまを教えてください。発見する楽しさを身につけることは、やがてこれらと共存していくことにつながるのではないのでしょうか。未来へつなぐ子どもたちのためにつくられた、大人も楽しめる一冊です。(きのこのページはありません。)(公)

